

セントポール・グリーンハイツ内遺跡調査概報

中 川 成 夫
川 村 喜 一

はしがき

学校法人立教学院は、東京都板橋区上板橋七丁目、練馬区仲町一丁目に跨がる都の緑地帯三万五千坪を借上げ、総合運動場を建設することとなり、一九五五年一月二日に鉄入式を行った。爾来小川造園KKの手により土事が進められ、球技・トラック競技など、すべての近代陸上スポーツを行い得る総合グラウンドが翌年一月十二日に完工を見た。

この地は旧豊島郡上板橋村栗原、及び下練馬村今神浦に属し、北豊島郡誌、板橋区史にも記されていること、先史時代より近世までの種々の遺跡を含み、また、縄文文化研究史上、栗原式と呼ばれる早期の土器を用いた

すること、特に詳名であつた。⁽¹⁾このたびの建設工事に際して、これらの遺跡はすべて破壊・湮滅したが、幸に学院当局・大学当局・同窓会・体育会・施工者小川造園KKの理解ある処置や援助により、本学文学部史学科の調査事業として、多くの考古学者・研究者・郷土史家・学生生徒諸氏の協力によつて、その一部を発掘し、遺跡の一部も保存・復原することができた。加之、学院当局は報告書の出版にも経費を計上され、その任を史学科に託された。爾来、我々はその執筆・編集にたづなわつて来たが、今、その仕事もほぼ一段落を告げたので、ここに本誌上をかりて、その概略を報告する次第である。⁽²⁾

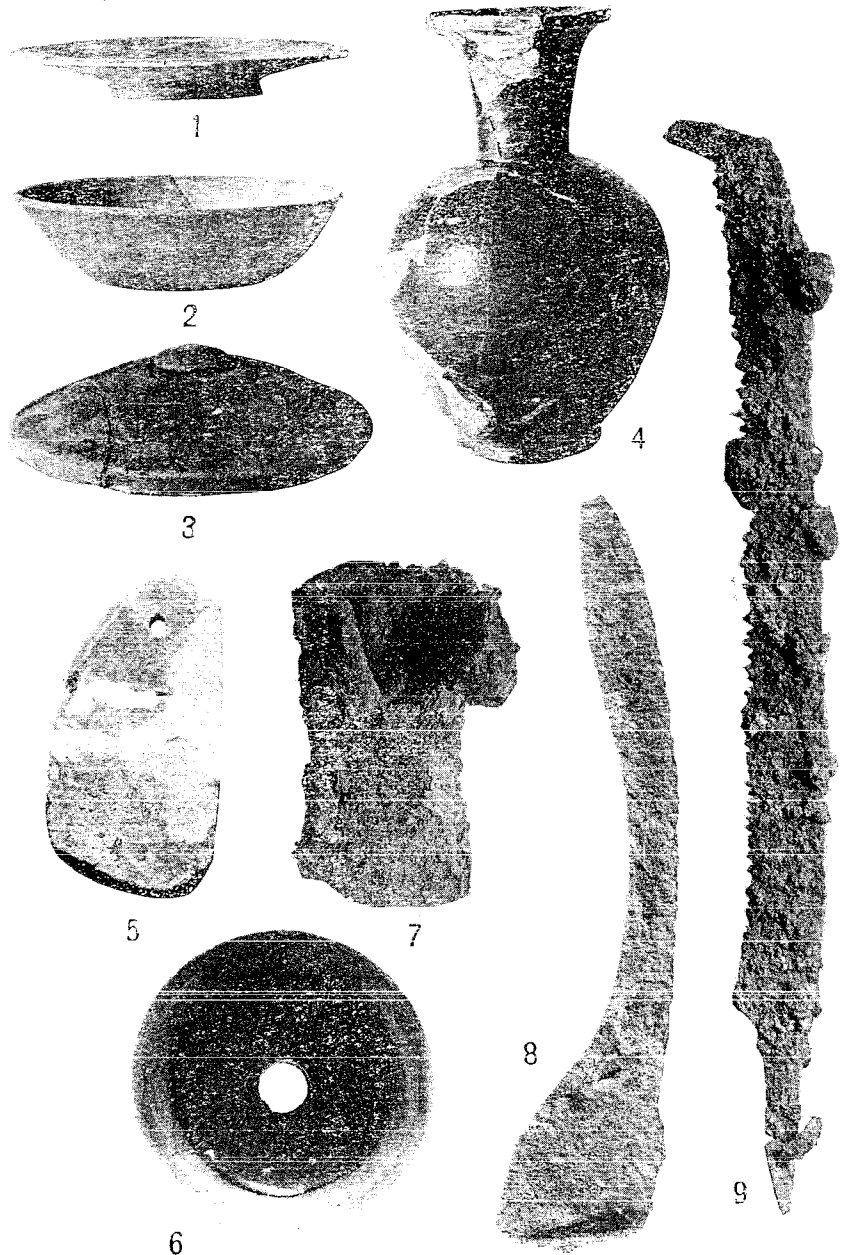
本稿を草するにあたり、発掘調査に直接御協力いた

図版1 グリーンハイツ内出土品（弥生式土器、土師器）



1,4,5 1:3; 2,3,6,7 1:5

図版2 グリーンハイツ内出土品（須恵器、石製品、鉄製品）



1~3 1:3; 4 1:5; 5 1:2; 6 1:1; 7,8 2:3; 9 2:7

いた方々の芳名を左に録し、深く謝意を表する次第である。

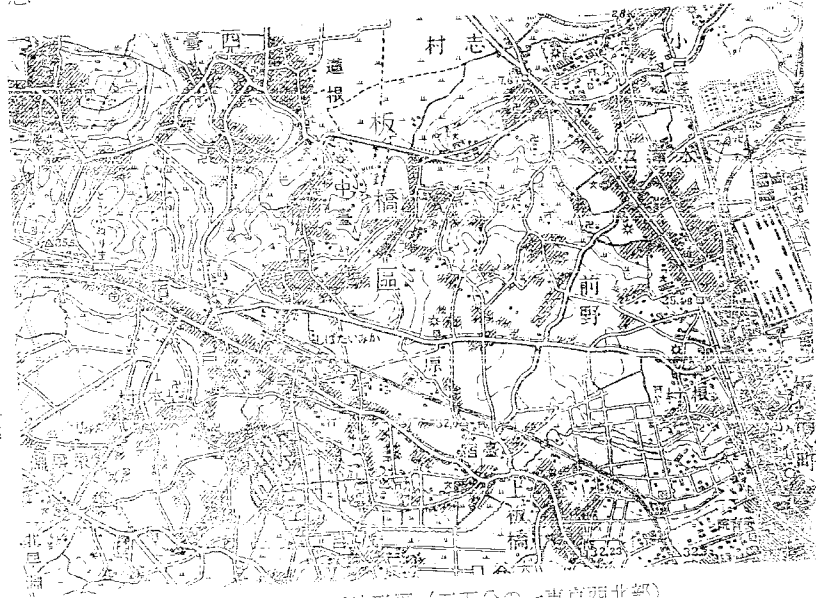
東京大学文学部考古学研究室、早稲田大学考古学研究室、日本大学考古学会、東京教育大学文学部歴史学研究室、立教大学史学研究会、立教高等学校地歴研究部、立教中学校地歴研究部、城北高等学校、武蔵高等学校、開進第一中学校、豊溪中学校、開成学園、文京区立第十中学校の教員・学生・生徒諸氏、地元の高野進芳・加藤源藏・守山大樹及び先輩平井尚志の諸氏

遺跡附近の地形

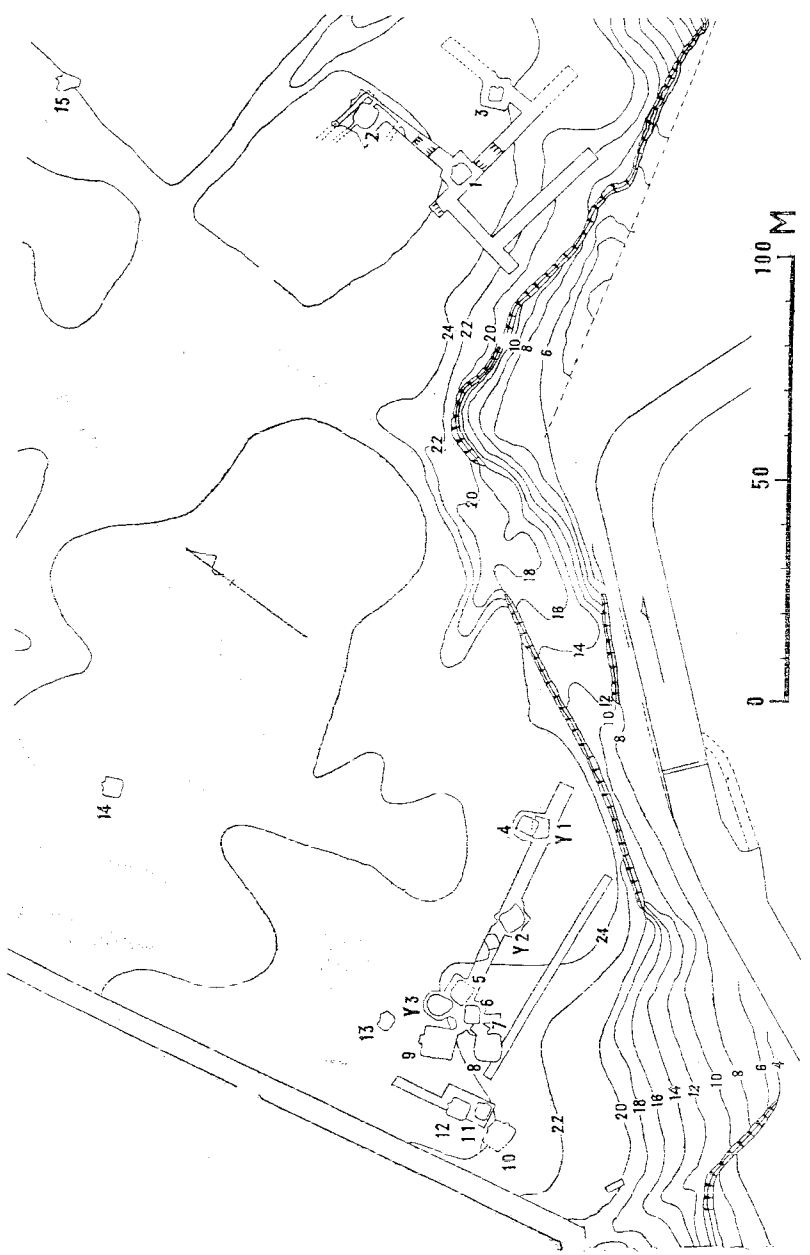
(第1図)

遺跡のあるセントポール・グリーンハイツは、前述のごとく、かつてこの北豊島郡上板橋村栗原、及び下練馬村今神前の両小字に属し、この台地はいわゆる武蔵野台地の一部で、東南隅を石神井川が大きく南に彎曲して流れ、その対岸に茂呂台地があり、東側は田柄川が流れ、北は川越街道を越え、志村の台地と相對している。台地は標高約三三米、石神井川扇状地との比高は約一〇米で、西南側は緩く傾斜するが、東南側は崖状になっている。工事中の観察によれば、台地上、東南・西南斜面にはローム層中の礫とともに石屑片が見られ、縄文式土器は台地上のほぼ全域に散布し、弥生式土器・土師器・須恵

セントポール・グリーンハイツ内遺跡調査概報



第1図 遺跡附近地形図(三万分の一東京西北部)
斜線部分がセントポール・グリーンハイツ



第2図 遺跡地形実測図 (単位は尺)

器破片は、主として台地上、及び東南・西南部の斜面近くに見られた。

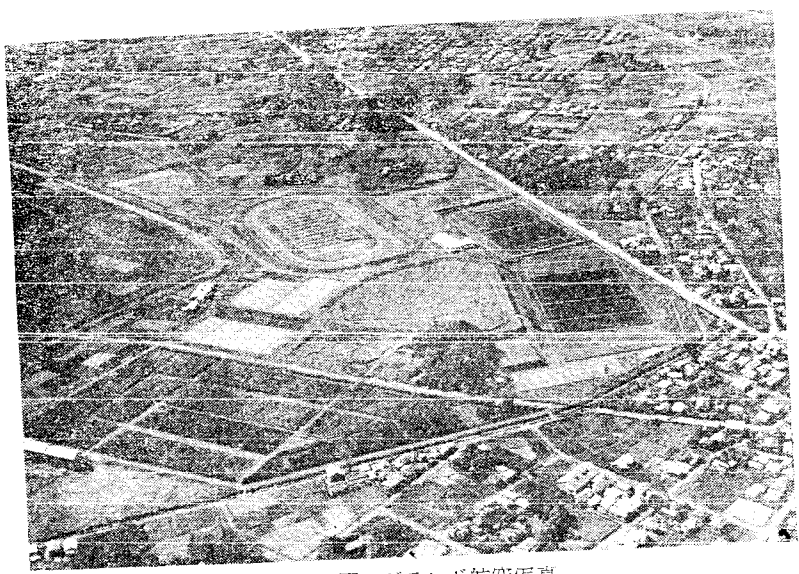
我々が調査し得たのは、ブルトナーによる削平を僅かに免がれた、東南、及び西南部の緩斜面のごく一部にすぎず、台地頂部、現在の陸上競技場附近は、二〇個以上の縦穴断面が見られたが、ほとんど手をつける余裕はなかつた。

調査の経過 (第2図)

調査は工事の進行にともない、数次に分けて行われた。

第一次調査、一九五三年一月八日―一七日
 日本大学考古学会が地元中学校の協力を得て、東南側緩斜面(現在のバレーコート)を発掘調査した。当初、縄文文化遺物の層位的検出を目的とし、巾三尺のA-Eトレンチ、延長一三五米を設定調査の結果、予想に反して、土師器伴出堅穴三個が現われた。これをH1、H3と名づけ発掘した。この地区を東部地区と称した。

第二次調査、十二月一日―三十一日
 本学・東京大学・早稲田大学が高校・中学の生徒諸氏の協力により、台地西南側(現馬場北側、及び復原住居附近)を発掘した。巾三尺、長さ七〇米のFトレンチを設



第3図 グランド航空写真

セントポール・グリーンハイツ内遺跡調査概報

定、弥生式竪穴三、土師器出土竪穴六（未発掘を含む）を発掘し、これをY1-Y3、H4-H9と命名した。また台地上の現トラツク競技場中に断面を露出している竪穴二を発掘し、H14・H15とした。この地区を西部地区と称した。

第三次調査、一九五六年一月一日-二十五日

東京教育大学・文京区立十中の諸氏の手により調査、Fトレンチに併行に巾一・五米、長さ五五米のGトレンチ、また直角に巾一・五米、長さ三三米のHトレンチを設定し、H10-H13の竪穴を発掘し、またH8の完掘を行なった。ついで三月一日-三日の間ゴーム層中より出土する石器群（無土器文化）の調査を行った。

第四・五・六次調査、五月三十一日・六月五日-十六日・七月五日-十六日

この期間に本学石島渉教授の指導の下に、本台地の西南屋簷に深さ五米の竪坑を穿ち、層序を確かめ地質学的調査をおこなった。

また、H8・H9を復原保存するために、竪穴調査を実施した。これには、竪穴の発掘を担当した早大松井清彦講師、東大岩崎卓也助手の立合を求め、東大藤島玄治郎博士の指導の下に本学々生も参加して、竪穴周



第4図 Fトレンチ発掘状況

辺部の柱穴址を追求した。

復原住居建設 十月一日-十三日

藤島教授の設計図にもとづき、本学富経課の矢作大助課長の手によって施工した。H8は竪穴平面のみを復原し、H9は土壁をも復原し、併せて外軸・観眺板を建て、十一月十三日の完工式に公開した。（第一〇・一一）以下が本遺跡の全調査の概要である。次に遺跡について述べる。

遺跡

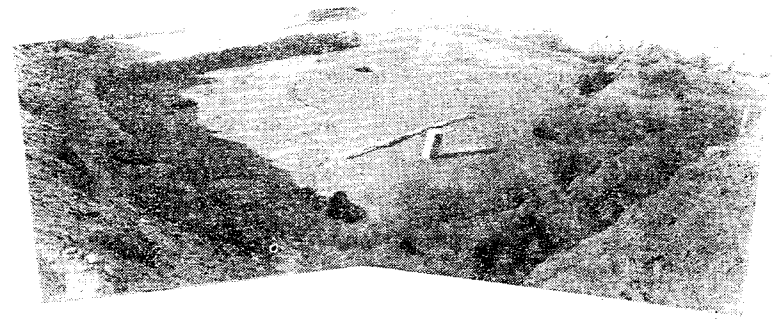
前述のごとく今回の調査では、弥生式の竪穴三（Y1-Y3）と、土師器を出土する竪穴一五（H1-H15）を発見した。遺跡の関係上要点のみを記し、各住居址については表記する（第一表）。なお竪穴発見のために設定した八平のトレンチ（A-D）からは、縄文式土器片、弥生式土器片、土師器片、須恵器片が出土したが、縄文式土器では壺ノ内式が中心で、若干の早期破片といわゆる局部磨製石斧二、打製石斧一が発見された。またDトレンチからは炭化米一俵が発見された。

Y1-Y3はいずれもFトレンチから、ほぼ等間隔に台地の縁に半行に発見されている。形状はややふくらみを持った方形で、面積はY1が五・五坪、Y2・Y3は

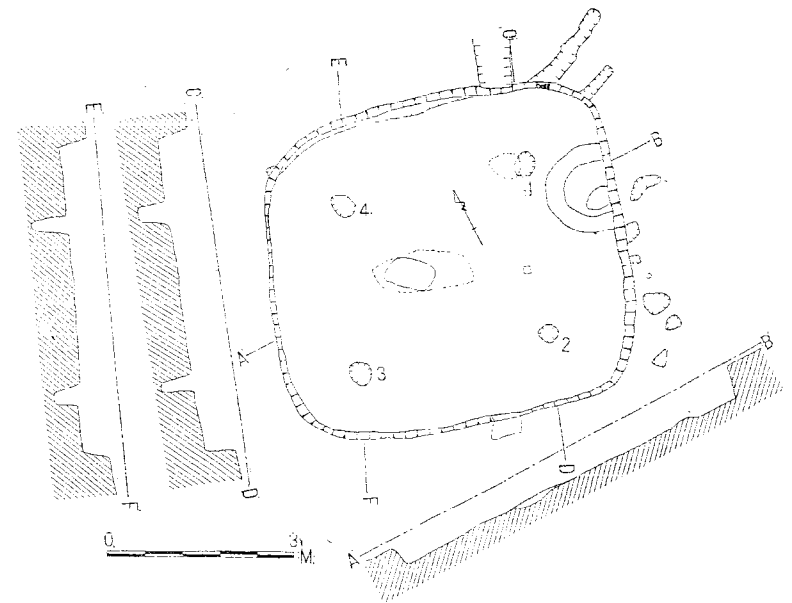
セントポール・グリーンハイツ内遺跡調査概報



第5図 住居址発掘掘削状況（竪穴H8）

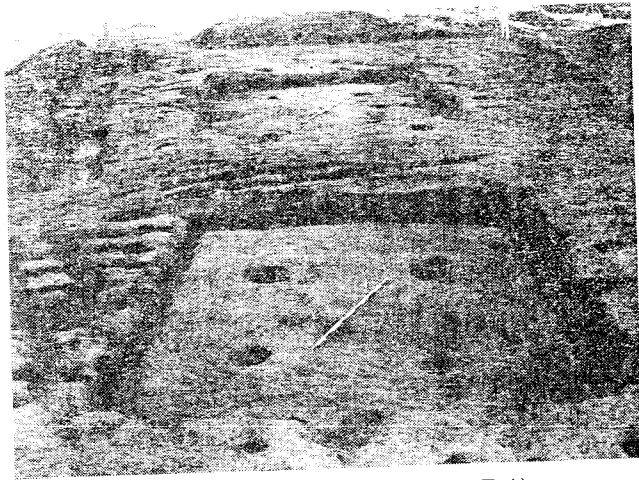


第6図 Y2号址全景

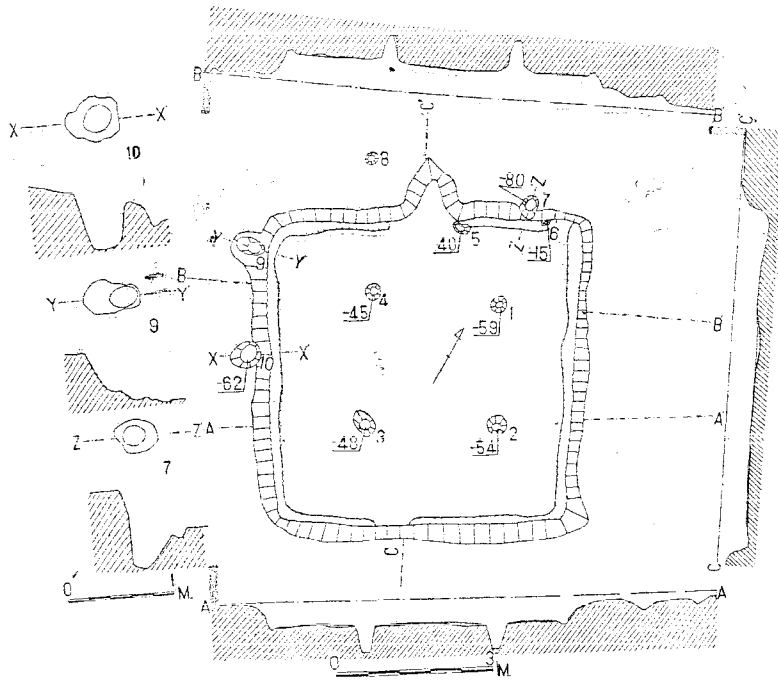


第7図 Y2号址実測図

H 15	H 14	H 13	H 12	H 11	H 10	H 9	H 8	H 7	H 6	H 5	H 4	H 3	H 2	H 1	Y 3	Y 2	Y 1	名称 トレンチ
方	不整方	長方	方	長方	長方	方	長方	不明	方	長方	長方	方	方	長方				形状
25~30?	?	45	18~32	26~32	55	45~50	45~55		36~40	30~35	32~48	43~52	45	32~34	40	45	30 cm	壁高
4.3×4.2 6.5	3.7×3.6 4.0	3.25×2.35 2.3	4.3×4.1 5.3	3.5×3.1 3.3	5.9×5.0 8.9	5.7×5.8 10.0	5.8×5.4 9.5		4.3×4.3 5.6	4.8×3.6 5.2	3.9×4.3 5.1	3.2×3.2 3.1	4.3×4.3 5.6	4.27m×3.7m 3.6坪	8.0	8.2	5.3 坪	面積
有	有	無	無	有	有	有	無	?	有	有	有	有	有	有?				周溝
北	北	北	北	東	北・東	北	東・東		西	北	北	東	北	北				位置
粘土	粘土	?	粘土			粘土	粘土		粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土				構造
																中央	北	位置
3			4			4	4		4			3	4		5	4		主
1	11		4	3?	5	6	9			4		23	23	28			1	他
有			有						有							有		穴
	有			有			有						有					焼土
○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	彌生
	○	○	○	○		○	○			○	○			○				土師
			○			○	○					○						須恵
	○			○		○								○				石製品
○			○				○			○								土製品
			○				○			○								鉄製品
			○				○			○							○	自然
未完掘	柱穴は 外へて 外に あり		北壁東端 に張り 出し	東壁北隅 に張り 出し	未完掘	床面に5 寸を 掘り 土を 焼く 火址 あり	竈は東壁に二 間、柱穴の中 7は竈穴外、 炭火並あり	と複合 H 5・H 8		複合 Y 3と	複合 Y 1と	外16柱 穴の中	外主柱 穴以	外柱 穴は竈	複合 H 5と		複合 H 4と	備考



第8図 H9号址全景（前方はH8号址）

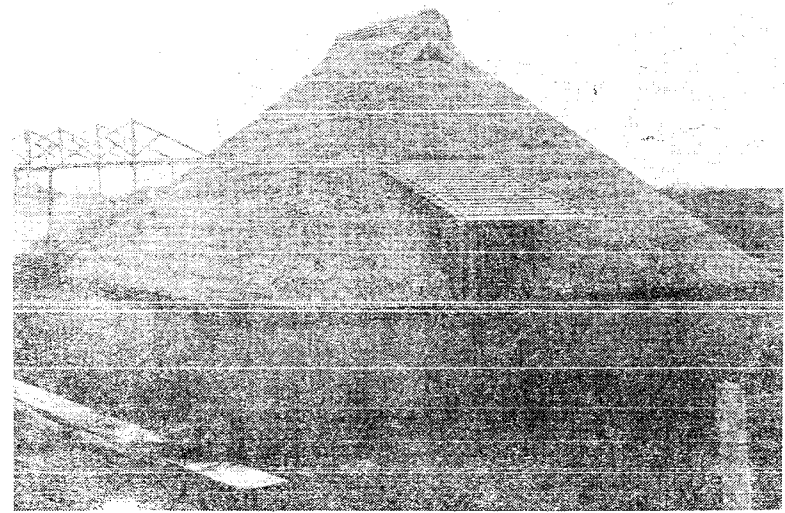


第9図 H9号址実測図

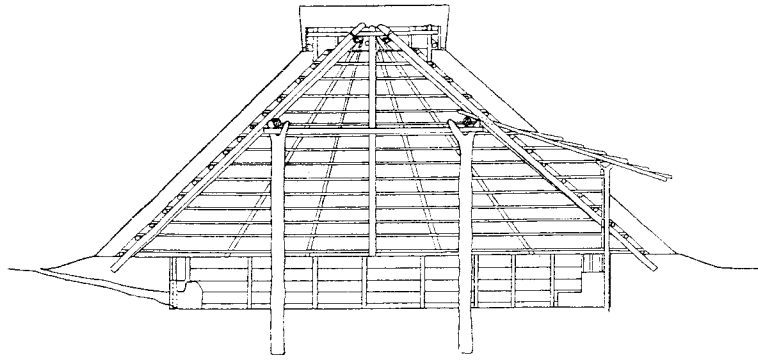
八坪内外で、Y2・Y3では中央西寄りに炉がある。柱穴はY1では発見されず、Y2・Y3ではほぼシンメトリに存する。

H1とH15はいずれも方形乃至長方形を呈し、ロームを二〇〜五五掘り下げて作られている。二・三坪から一〇坪と面積はまちまちだが五坪前後が多い。H7はH6・H8の両方に切られ、床面・壁面の一部を残すのみで全貌は知り得ない。竈はH6を除き、北壁または東壁のほぼ中央に構築されているが、北壁が三分の二を占める。H8・H10は二ヶ所にある。(第二二図)材料には粘土が用いられ、H8・H9・H10(東壁の方)・H14・H15は両袖の芯として使用済の長鬘をふせて用いている。柱穴は主柱穴を持つもの七、壁外のみに残すもの二、全く認められないもので、主柱穴を持つものでも画面の壁外に柱穴を持つものが多い。H11・H12は北東隅に張出しを持つ。H2・H8・H11・H14には床面上に煙土が認められたが、特にH5・H8は棒状の木炭とともに多量に残存しており、火災にあつたことを思わせる。H8・H9・H14には焚火の跡があり、H9の床面には五〜一〇種の厚さに粘土質の黒色土がしいてあつた。

遺物 (第二表)



第10図 復原住居全景



第11図 復原住居断面図

0 2 M

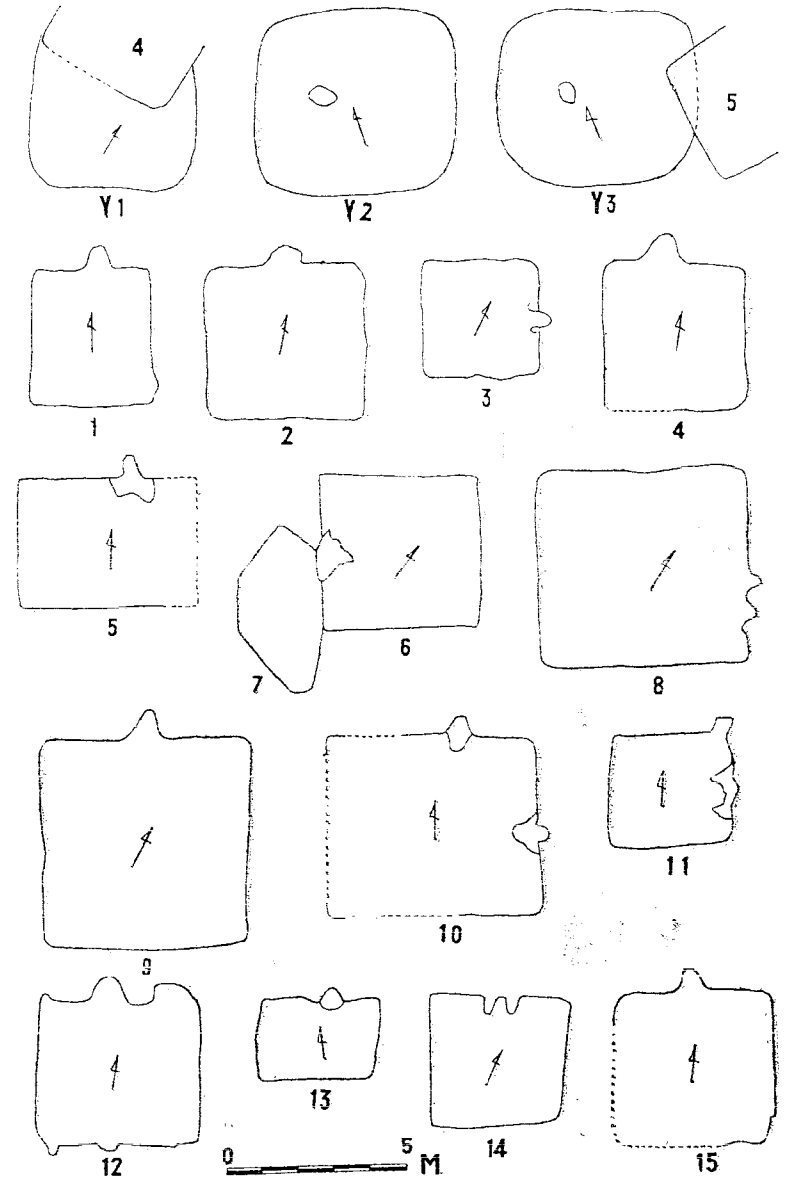
Y1とY3からは鉢(図版一・1、第13図上)・高坏・壺・甕が発見されたが、完形品は少なく壺・甕が中心である。壺はいずれも口頸部のみで、巾広の複合口縁を有し、四本あるいは八本一組の隆線を四ヶ所に付している。肩部はS字状結節文で区劃され、細かい羽状縄文が帯状に施されている。(図版一・2第13図) Y1出土の

口径二八・五種の大形の壺は、まづたく無文で複合口縁の中も一・五種にすぎない。甕は台付で一面に刷毛目が見られる。口径は胴径に比べやや短かい。口縁は刻目を有するものと、指頭による圧痕が波状を呈するもの(図版一・3、第13図3)とがある。後者には肩部に棒の先端に布を巻いて押した圧痕が帯状にめぐらされている。以上遺物はいずれも弥生町式に属するものと考えるが、第13図3の甕は本類の中ではやや古いタイプと思われる。なお土器以外の遺物は出たしなかつた。

皿形土器	口径 > 3
碗形土器	口径 < 3
鉢形土器	口径 < 3
壺形土器	口径 > 15 cm
甕形土器	口径 > 胴径

H1とH15においては、遺物はH6・7を除くすべてに完形土器が発見されたが、土器が多く、器形は皿・壺が中心である。従来器形に対する名称に統一を欠き特に皿・坏・碗・甕・壺の区別が不明瞭であつたので、上のごとく規定した。

皿は器肉の厚いものと薄い

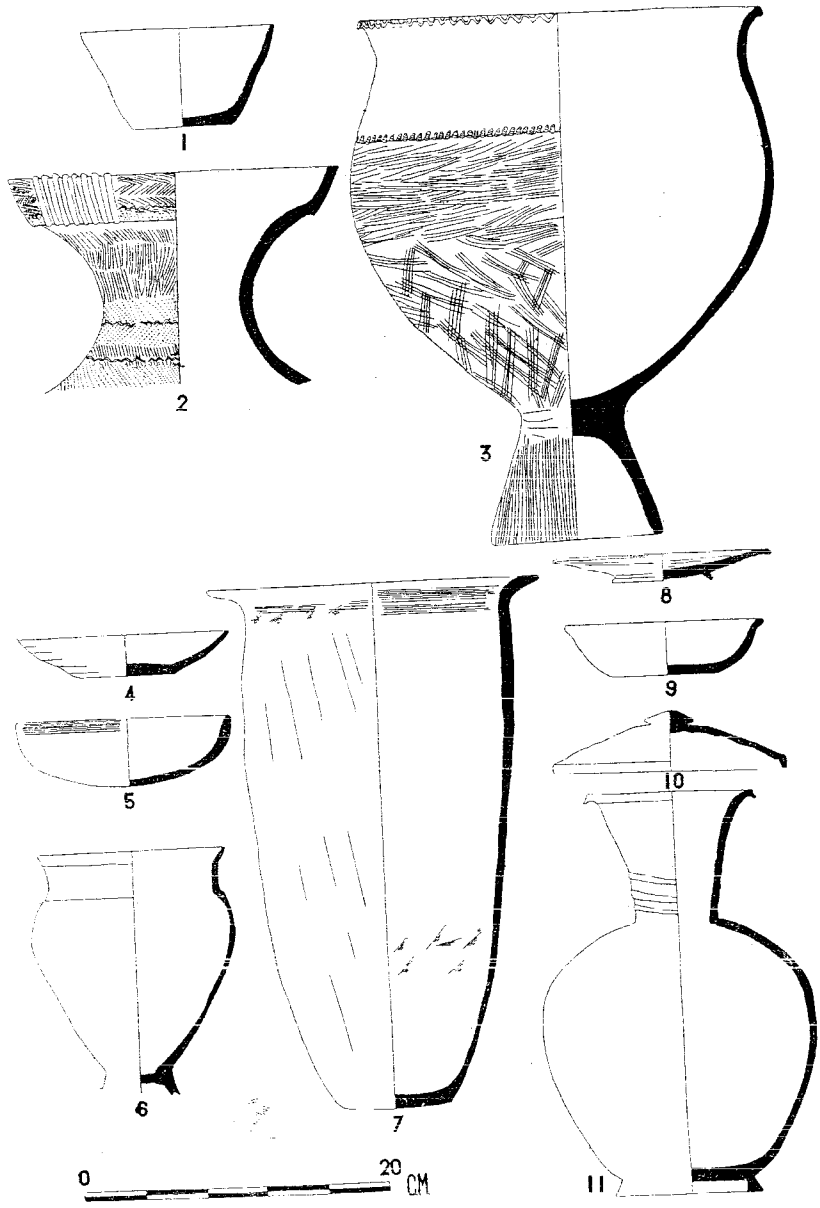


セントポール・グリーンハイツ内遺跡調査概報

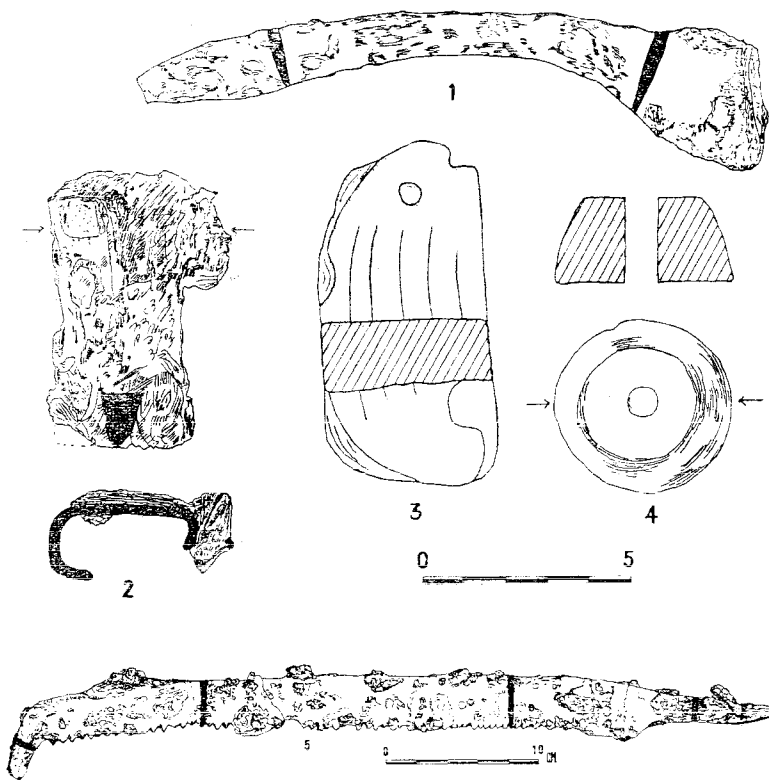
九六

第12図 堅穴方位集成図

H 15	H 14	H 13	H 12	H 11	H 10	H 9	H 8	H 7	H 6	H 5	H 4	H 3	H 2	H 1	Y 3	Y 2	Y 1	名称
																	1	鉢 彌生式土器
																1		鉢 高坏壺
															1	1	3	壺 甕
															2	1	1	甕 其他
	1	1	2		5	4	8			2		1						皿 土師器
1	1		1			1	1			1		1						碗 壺
			1	1		1	1			2	1		1	1				壺 其他
5	4	4			4	2	5					2						甕 其他
						脚 1	甕 1			脚 1								其他
		1	1							10	1			1				皿 須惠器
				1			高台付 1											碗 蓋
	2									2								蓋 其他
			長頸壺 1	大型破片		高台付底部 1	大型底部 1 大型破片			高台付底部 2								其他
	土製支脚 1		砥石 1	土製支脚 1		土製支脚 1	石製紡 錘車 1			砥石 5		砥石 1		土製支脚 1				石・土製品
鎌 1	鉄 滓		鎌 1 手斧 1 其他				鎌 1 滓			刀子 3 嵌 1 鎌 1. 鋸 1. 釜 1. 鍬 其他								鉄製品
			カシワ				モモ シ・ウン ズ ススキ?			ムクロジ, クスギ アラガン							エノキ?	自然遺物



第13図 土器類実測図



第14図 金属器・石製品実測図

ものがあり、前者は丸みをもつた底、後者はロクロ痕が平行に走り、平底で、また糸切底のものもある。(図版一・4、第13図4、H12出土) H3・H8・H10・H14・H15出土のものには新宿区落合遺跡出土のものに類似したものがあり(図版一・5、第13図5)他に比べ、古いタイプと思われる。壺は薄手で高さ一五厘内外の小形のものも多く、完形品はないが台が付く。頸部のくびれは一段の稜を持つ。(図版一・6、第13図6、H12出土)

甕は長甕で口縁部は外反が著しく、頸部のくびれはほとんど見られない。底は平底であるが、小さく不安定である。甕の両袖に利用されたものが多い。(図版一・7、第13図7、H14出土)

以上土師器はH3・H8・H10・H14・H15出土のものに落合式(真間

式)があるが他は国分式に属するものである。

須恵器は皿が中心である。ロクロ痕が顕著にみられ、口縁部はわずかに外反する。平底、あるいはヤン揚底、糸切底が圧倒的に多い。(図版二・2、第13図9、H5出土)一四例の中一〇例がH5出土である。H13出土の高土(図版二・1、第13図8)は非常に浅く、整形・焼成台付皿(図版二・1、第13図8)は非常に浅く、整形・焼成共すぐれている。蓋がH5・H14(図版二・3、第13図10)より各二個発見されたが、ゆがんでいてあまり良質でない。H12出土の長頸壺(図版二・4、第13図11)は高さ二六・三厘、整形・焼成ともすぐれ、肩部から胴部にかけ自然釉がみられる。他に埴や大形甕の破片がある。

このほかゴトク役目をなす土製支脚四、石製品として砥石七(凝灰岩六、緑泥片岩一)紡錘車一(玄武岩)がある。図版二の5の砥石は携帯用であろうか、長さ八・六厘で径〇・五厘の穴が穿たれている。紡錘車(図版二・6)は底径四・三厘、高さ二・〇厘、黒い光沢を有する。

鉄製品は、H5・H12に多く、H5からは刀子、鏃、鎌のほか、全長五〇厘、刃渡り三五厘、巾三厘の鋸(図版二・9、第14図5)が出土、また鑿・鎖・棒状の芯の通った径五厘の円板状の留金具と思われるものが発見された。H12からは鏃、長さ六・〇厘、刃巾三・五厘の手斧

(図版二・7、第14図2)、H5と同類の芯の通った円板が発見された。他にH8・H15から鎌が出土している。図版二・8はH8出土のもので全長一五厘、最大巾三厘で非常に薄い。

自然遺物は、H8からモモ・マンシニウアンズ・ススキ? 等が、H5からはムクロジ、クスギ、アラガンが、YIからエノキ? が炭化して発見された。

前述のごとくH5からは豊富な遺物が出土したが、特に須恵器・石製品・鉄製品は本調査の出土品の半数以上を占め、鋸・鎖・円板状のものなど、従来あまり発見されなかつたものを含めて、鉄製品に顕著な特色をもっている。H1とH15の出土遺物の中心をなした土師器の多くは、杉原社介教授のいう国分式であり、また須恵器もこれに伴うものである。

以上からこの鑿穴群の時期は、ほゞ七、八世紀頃のものとして大過ないであろう。

尚本年三月および五月の調査で、Gトレンチの西端より南方三五米に設けたピットにおいて、軟質ロームと硬質ロームの境より、三片の割片および配礫の一部と思われる礫数個を採集した。

概括

彼上の遺跡・遺物調査の結果、本グラウンド内には遠く洪積世より人類が生活していたことが知られ、次いで縄文文化初頭の遺物や、AD略々四世紀頃の農耕集落の址、及びほぼ奈良時代頃と考えられる庶民集落址の存在が確認された。前述のごとく、報告書編集中のため、おのおのの時期・性格・文化内容などについて、未だ決定的なことは述べ得ない。本調査において、われわれが最も興味をもち、かつ調査の中心となつたのは、土師器・須恵器を出土する竪穴群―集落址であつた。

東京西北部丘陵地帯に此の時期の竪穴群の多いことは周知のことで、その代表的な調査として、和島誠一氏の板橋区志村小豆沢における調査をあげることができ(3)、本遺跡の集落址は前述のごとく竪穴の構造、及び出土遺物より、後期の様相をもち、実年代は略々七・八世紀の頃に比定される。今当時の武蔵の状態を文献によつて見ると、大宝元年(AD七〇一)大宝律令が施行され、武蔵国は、従来の知々夫・胸刺の国造の旧域を統合して建てられ、内に豊島・秩父など一九郡が置かれた。その後、続日本紀によれば、靈龜二年(AD七二六)高麗人を遷して高麗郡を置き、さらに天平宝字二年(AD七五八)に新羅人を遷して新羅郡を置き二一郡となつた。この

内、豊島郡を現在の東京の山手の西北部に比定することは諸家の見解の一致するところである(4)。

倭名類聚鈔、及び国分寺献進瓦によれば、豊島郡には、日頭、占方、荒臺、広岡、湯島、余戸、駅家の諸郷があつたことが見えるが、柴田常恵氏はこの内の広岡郷を現在の板橋・練馬・北区の丘陵地帯にあてゝおられる(5)。氏はその論拠として、新羅郡は後の新座郡であり、現在の東上線志木附近、即ち柳瀬・白子川の流域を占め、豊島郡の西北方にあつた。続日本紀によれば、宝龜十一年、新羅郡の人、沙良真熊等二人に広岡造の姓を賜つたことが記されている。これは広岡郷が新羅郡に接していた一証となし得る。というのである。同氏の見解に従うならば、本遺跡の土師器伴出集落址も、広岡郷の庶民のそれと見ることが出来る。武蔵国分寺址出土の豊島郡の献進瓦に、土師・椋崎・刑部・宇遅部などの部民の名が見える。然し広岡郷にどの様な部の集落があつたかは今日の処、全く不明である。また本調査中に濠の存在を認めめたが、この追求や集落規模の確認は出来なかつた。従つて古代史研究の焦点となつている家族構成、例えば戸と家の実態についての考古学的資料の提供などは出来なかつたことを遺憾とする。然し乍ら荒川本流の同種遺

跡より年代的には新しい点より、広岡郷という地域社会を構成した集落の一单元と認めることが出来よう。

我々は本調査資料が不十分ではあるが、古代史研究の上にいさゝかなりとも新資料を提供し、活用されえたら望外の幸である。

終りに本稿草するに当り、諸学友より多く御教示を得たことを記して深く謝意を表す。

註

- (1) 北豊島郡農会 東京府北豊島郡誌 大正七
- 板橋区史刊行会 板橋区史 昭二九
- 吉田 格 武蔵野の石器時代 武蔵野文化協会 昭三〇・六
- 白崎 高保 東京稲荷台 古代文化十二 八 昭一六・八
- 稲荷台文化の研究 先史遺跡 古代文化十三 八 昭一七・八
- 江坂 輝彌 石器時代遺物 武蔵野三四 二 昭二〇・六
- 吉田 格 新収品に就て 日本考古学年報 昭三〇・一一二
- 岡本 勇 東京都板橋区 栗原遺跡 昭三〇・一一二

(2) 本報告書の予定内容は次の如くである。

題名

- 栗原―セントポール・グリーンハイツ内集落址発掘調査報告
- 体裁 B5版横組、本文二〇〇頁、図版コロタイプ三〇葉
- 内容 第一章 序 説 第二章 遺 跡
- 第三章 遺 物 第四章 考 察

セントポール・グリーンハイツ内遺跡調査概報

第五章 総 括 附 篇

- (3) 和島 誠一 東京市板橋志村原史 考古学雑誌二八 一 時代竪穴調査予報 八 昭和一七・七
- (4) 新宿区史、北区史、板橋区史などに見え
- (5) 前掲 板橋区史

附記

調査に御協力頂いた渡辺直経氏の熱残留磁気方位の研究によれば本遺跡の弥生式竪穴の年代はAD三五〇―四五〇、土師器出土竪穴の年代はAD五〇〇―七〇〇の頃とされている。